國學院大學学術情報リポジトリ

井上毅と井上家系譜考

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 益井, 邦夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001986

井上毅と井上家系譜考

益井邦夫

要旨

肥後国熊本藩家老長岡監物の家臣飯田家に生まれ、井上茂三郎の養子となった井上毅は明治四年（一八七一）、司法省に出仕、フランス留学後、大久保利通に登用、彼の没後、岩倉具視に重用され、明治一四年の政変では岩倉、伊藤博文派に属した。ドイツ式国家体制樹立を主張して大日本帝国憲法、皇室典範、教育勅語、軍人勅諭などの起草に努め、第一次伊藤、黒田、及び第一次山縣内閣で法制局長官、第二次伊藤内閣では文部大臣を担い、近代国家日本の基礎構築に尽力、その傍ら明治二一年（一八八八）、皇典講究所規則改正会議において、山田顯義に次いで登壇し、憲法政治の実施に際して、建国の理想を体現して尊皇愛国の実を挙げ、国家の隆昌、国民の繁栄に貢献せんとする本所が果たす役割は重要であると説き、以後、國學院の創設に深く関わった。その井上の家系譜について、これまで詳しく語られることは稀であった。そこで井上本家、および所縁の方々のご協力を仰ぎ、井上家系譜の調査に努めた。その概要を綴る。

キーワード

源、井上、山田、飯田、鈴木、津田、加藤藩、細川藩

はじめに

國學院大學図書館が収蔵する井上毅（天保一四〔一八四三〕年―明治二八〔一八九五〕年）の『梧陰文庫』に「井上家系譜」と言う美濃紙三三枚に書かれた書類が含まれている（『梧陰文庫総目録』國學院大學日本文化研究所編、整理番号II―403）。これを平成一八（二〇〇六）年八月九日に閲覧した。これは井上毅以外の者、恐らく鉄道大臣や技術院総裁等を務めた婿養子の井上匡四郎（明治九〔一八七六〕年―昭和三四〔一九五九〕年）が記述したものと思われる。

ひと頃〝ルーツ〟と言う祖先探しが流行ったが、近代日本の夜明けに遭遇し、明治新政府に登用され、新たな法制度の骨格作りに重要な役割を果たした井上毅が、如何なる系譜の下に生まれ育まれたのか、その背景を探ることによって、「井上家系譜」の内容を充実させたいと思う。

抑もこの調査は平成一七（二〇〇五）年一〇月二六日、井上一志と言う方から「國學院大學には井上毅の肖像写真が一枚も無いということなので、所持している写真のコピーを差し上げます」と言う内容の手紙とコピーを戴いたことに始まる。即ち、前年四月二三日、練馬区大泉学園に在住の方が来訪され、井上毅について自身が調べたことを話された。この方は日本の近代史研究を趣味に、いろいろと調べられていたが、その時の応対の言葉を早とちりしてか、自身が公開するホームページに記述した感想文を読まれた井上氏が親切にコピーを送って来て下さったのである。筆者の手許には戴くまでもなく井上の写真はきちんと保存し、利用している。直に井上氏に連絡を取り、顛末を話して納得して戴いたが、井上氏との出会いはこれが切掛けであった。一一月三日には世田谷区経堂のご自宅を訪ね、氏が所蔵する資料を閲覧した。

井上毅の写真、家紋、親類縁者の色紙、手形のある祖先の経歴類を一通り確認した後、井上毅が眠っている台東区谷中の日蓮宗慈雲山瑞輪寺山門に掲

写真１　29代（16代）井上彌兵衛好喜の「一国一人」と記された御鉄砲方免許状（文化５〔1808〕年）

げられた井上毅揮毫の扁額「瑞輪寺」[1]の「瑞輪」二字の額装を拝見した。額装には文字の左側に切れ目があり、恐らく「寺」の字の部分を表装の際に削除したのだろうと思われる。山門の額は寺の求めに応じて揮毫したのだろう。寺用の他にもう一枚書かれたらしく、それを井上氏の長兄井上毅一氏が額装し、井上氏が所蔵したものであった。

筆者はそれを後日『井上毅と梧陰文庫』（平成一八年二月、國學院大學日本文化研究所刊）所収の拙稿「〝井上毅〟掃苔」で紹介した。平成一八年八月一一日、井上毅一氏にも対面した折、額装の顛末を伺ったりもした。ご兄弟は井上本家の後裔に当る方々であった。

井上氏との出会いが緒となり、系譜作成の協力を仰ぎ、主に井上氏を通じて縁戚古老の方々の記憶を呼び覚ます調査を開始し、八月三日には粗末な内容ながら最初の系譜を書き、それを叩き台に、以後、幾度となく改稿し、四年を経た平成二一（二〇〇九）年一二月になってほぼ全貌を見るまでに書き上げるに至ったが、なお修正する部分が多々有り、牛歩ではあるが今後更に補足して行きたいと考えている。

井上氏の話によれば、井上本家には立派な家系図が存在したと言う。だが残念ながら昭和二〇（一九四五）年三月一〇日の東京大空襲で、文京区本郷春木町（本郷三丁目）に有った家（井上耳鼻咽喉科病院）と共に焼失してしまったと言う。それには歴代当主の手形が押されていて、現存していたなら、手相学の研究はもとより、わが国「系図学」にも一石を投じたであろう貴重な系図だったと述懐された（写真1）。今回、再起を期しての新規作成である。以下に主要な部分のみを綴ることにした（敬称略）。

1．井上家の源流を辿る

井上家の祖は家伝によれば信濃源氏の祖清和源氏頼季流と言う。そこで『尊卑分脈』を参考に辿ると、源頼季（生没年未詳）は多田源氏の祖源満仲（延喜一二〔九一二〕年―長徳三〔九九七〕年）の孫で、満仲の三男（源頼光・頼親の弟）、鎮守府将軍源頼信（安和元〔九六八〕年―永承三〔一〇四八〕年、河内源氏）の子に当り、井上三郎乙葉入道と称した。源頼信が長元元（一〇二八）年の平忠常の乱（平将門の後裔が房総で起こした乱）を平定して東国に勢力を扶植し、次いで次男頼季が嫡男満実（井上満実、生没年未詳）と共に信濃国高井郡井上（長野県須坂市井上）に住したことから井上氏の祖（初代）となった。

『系図纂要』によれば信濃源氏井上家は「鎮府将軍源頼信の三男頼季（生没年未詳）より出で、頼季の子満実、信濃国高井郡井上（長野県須坂市井上）に住し、井上三郎大夫と号す、子孫依て井上と称す」とある。のちに記す飯田家の祖は頼季の兄源頼清（長徳元〔九九五〕年―延久五〔一〇七三〕年）である。

また源満仲の弟満政の五代後（忠重―定宗―重宗―重実―重遠）に当る源重遠、即ち浦野四郎重遠（生没年未詳）の男浦野太郎重直（生没年未詳）は後述する山田家の祖に当る。浦野四郎重遠は信濃国浦野荘、現在の長野県上田市浦野を拠点としたことで浦野を姓とし、浦野太郎重直は尾張国山田郡山田荘、現在の愛知県名古屋市守山区に住し、山田先生を号したことから、後裔の多くは山田姓を名乗るようになった。これを踏まえて、先ず井上家の源流を追うことにする。

二代は源満実、別称井上三郎大夫または井上掃部助と言い、名を家季または満光と称し、長男の高梨盛光は高梨氏の祖となった。

三代は源光平（井上太郎）、丹波国（兵庫県）を領した。四代は源光長（井上又次郎）、五代は源清長（井上五郎）、六代は源忠長（井上・矢井守太郎）、七代は源経長（井上八郎）、八代は源長基（井上小太郎）、九代は源長実（井上五郎）、一〇代は源長敎（井上九郎太郎）、一一代は源長國（直國、井上源太、源太郎）、一二代は源直正（井上長太郎、兵太郎）、一三代は源正寛（実、井上兵太郎）、一四代は井上九郎左衛門正貞（初代）と続く。

ここに初代と付記したが、井上家には源頼季とこの井上九郎左衛門正貞をそれぞれ初代とする伝えが有るためである。以下にそれぞれの代数を記すが、井上九郎左衛門正貞は丹波国に住し、康正年中（一四五五～一四五七）には播磨国福井荘（兵庫県姫路市）を領とした。

一五代は井上九郎左衛門正長（二代）、一六代は井上九郎左衛門正直（三代）、一七代は井上九郎左衛門正行（四代）である。正行は天文三年（一五三四）九月一二日播磨国青山の合戦で討死（五一歳）し、法名を紹覚と号した。

一八代は井上九郎左衛門正信（五代、永正一〇〔一五一三〕年～天正一一〔一五八三〕年）。初め織田信長（天文三〔一五三四〕年―天正一〇〔一五八二〕年）に従い、次いで豊臣秀吉（天文六〔一五三七〕年―慶長三〔一五九八〕年）に仕え、近江・尼崎・播磨・隈本（熊本）など各地を転戦した後、播磨国揖東餝西両郡（兵庫県）を領し（揖東領主）、同地で没した（七一歳）。法名を道喜と号した。

2、近世時代の系譜

一九代は井上九（久）兵衛（六代、天文六〔一五三七〕年―慶長一七〔一六一二〕年）。少九郎、三郎太郎兵衛、孫兵衛、清左衛門などの名が有り、のち九郎左衛門正宗を名乗った。加藤清正（永禄五〔一五六二〕年―慶長一六〔一六一一〕年）に仕え（熊本藩士、食禄七百三十三石）、大蔵大膳、大蔵大夫の地位に有り、法名を宗庵と号した。弟四郎次郎外記正俊は徳川家康・秀忠父子に仕え、彼の子孫は江戸幕府の鉄砲方を務め、同家は幕末までその任にあった。

二〇代は婿養嗣子の井上勘兵衛吉弘（七代、永禄七〔一五六四〕年―寛永二〇〔一六四三〕年）である。加藤清正・忠広（慶長六〔一六〇一〕年―承応二〔一六五三〕年）父子の重臣（家老職五人の一人）で渋谷重次改め加藤大和守與左衛門重次（永禄三〔一五六〇〕年―慶長一八〔一六一三〕年）の弟に当り、初代で彌一郎、小源太の名が有り、法名を浄庵と号した。生まれは近江国甲賀（滋賀県甲賀市）であった。初め隈本城主佐々成政（天文五〔一五三六〕年―天正一六〔一五八八〕年）に兄加藤大和守與左衛門重次（食禄六千五百石、のち一万六千七百二十二石に加増）と共に仕えたが、成政が肥後国人一揆（天正一五〔一五八七〕年六月）など内政の失敗を豊臣秀吉から咎められ、尼崎への配流となり、浄土宗法園寺（尼崎市寺町）に於いて切腹させられたため、吉弘は新に熊本城主となった加藤清正に仕えることになり（食禄一千石以上、後に二千二十石に加増）、兄は佐敷城代（熊本県葦北郡芦北町佐敷字下町）となった。「文禄の役（一五九二年、第一次朝鮮出兵）」の際には、朝鮮に出兵した加藤清正に兄が同道したため、手薄になった佐敷城の留守居役として城を守った。薩摩国湯之尾（鹿児島県伊佐市）の地頭梅北宮内左衛門尉国兼（？―文禄元〔一五三六〕年）らが朝鮮出兵の命令を拒否して佐敷城を占拠した「梅北の乱」（天正二〇〔一五九二〕年六月一五日―一七日）の時、井上彦左衛門等と謀りこれを鎮圧した（井上彌一郎「梅北一揆始末覚」「梅北宮内左衛門一揆之次第」）。その後、朝鮮に出兵。のちに加藤清正の側役となった。寛永九（一六三二）年二代藩主加藤忠広の改易（出羽庄内藩主酒井忠勝〔文禄二（一五九四）年―正保四（一六四七）年〕にお預け、及び一代限りの出羽丸岡藩主〔一万石、山形県鶴岡市〕となる）後、近江国甲賀に帰郷、入道して淨庵と号した。更に摂津国尼崎初代藩主青山幸成（天

正一四〔一五八六〕年―寛永二〇〔一六四三〕年）の客分（廿人扶持）として寛永一一年（一六三四）に召し出されたが、尼崎で客死した。

二一代は井上市（茂）大夫重俊（八代、天正一三〔一五八五〕年―寛永一六〔一六三九〕年）で、加藤清正時代の食禄は二百四十六石八斗八升二合であった。父勘兵衛と弟彌一郎と共に甲賀に帰郷後、尼崎藩主青山幸成に父弟と共に食禄三百石で召出されたが、尼崎で病死し家督は弟彌一郎に譲られた。

二二代は井上九郎左衛門正幸（正之、九代、二代、天正一六〔一五八九〕年―万治三〔一六六〇〕年）が引継いだが、他に彌一郎、小源太、勘兵衛の名も有った。加藤時代の食禄は二百石であったが、のちに親族の井上小源太の養子となり家督を相続して六百七十八石となった。藩主加藤広公の改易後、父勘兵衛、兄市（茂）大夫重俊と共に一時浪人して甲賀に帰郷したが、暫くして昵懇の尼崎藩主青山幸成の客分として親子共に召し出され、市（茂）大夫は三百石、彌一郎は二百石を贈られた。市（茂）大夫は尼崎で病死、彌一郎は本家の家督を相続したが、尼崎藩が二代藩主青山幸利（元和二〔一六一六〕年―貞享元〔一六八四〕年）になった時、生まれ故郷の肥後熊本に帰郷を願い出て許された（寛永一二年〔一六四四〕三月）。加藤時代に城代を務めた伯父加藤（渋谷）重次の長子與平次改め重季（生没不詳、佐敷城代、改易後浪人、芦北で病死、正系断絶）と共に芦北郡佐敷（熊本県葦北郡芦北町佐敷）に移住、のちに彌一郎は妻女を伴って飽田郡池田村（熊本市）に転居した。妻女は美濃斎藤氏の一族である斎藤利三（天文三〔一五三四〕年―天正一〇〔一五八二〕年）の三男、即ち明智光秀（享禄元〔一五二八〕年―天正〔一五八二〕一〇年）の家臣斎藤利宗（永禄一〇〔一五六七〕年―正保四〔一六四七〕年）の女で、妹に将軍徳川家光（慶長九〔一六〇四〕年―慶安四〔一六五一〕年）の乳母となった春日局（天正七〔一五七九〕年―寛永二〇〔一六四三〕年）がいる。加藤時代の食禄は五千石余であったが、細川時代に変って五百石に減禄となった。寛永六（一六二九）年春日局の口利きで将軍徳川秀忠（天正七〔一五七九〕年―寛永九〔一六三二〕年）に謁見、許しを得て旗本衆に加わり、将軍家光（慶長九〔一六〇四〕年―慶安四〔一六五一〕年）の時、常陸真壁（茨城県桜川市真壁町）に五千石を封じた。

彌一郎は後年、二代藩主細川光尚（細川家三代、元和五〔一六一九〕年―慶安二〔一六五〇〕年）に召し出された（長岡監物組、三百石）。加藤時代の彌一郎は家老待遇の飯田角兵衛直景（永禄五年〔一五六二〕―寛永九年〔一六一二〕）の長子覚兵衛孫左（右）衛門（父覚兵衛同心隊指揮、管理組頭）と親しく、家が隣同志であった関係で覚兵衛直景に寵愛された。

二三代は井上九郎左衛門正廻（一〇代、三代、飽田郡坪井から内坪井に転住。寛永一四〔一六三七〕年―正徳一二〔一七一二〕年）。彌一郎、小源太、正道、求右衛門、図書の名が有り、熊本藩士、長岡監物組、のち田中左兵衛与。江戸・上方・長崎衆、御鉄砲組頭衆、三百石（二百石、他に役料百石）であった。「島原の乱」に参戦。井上左門、休之允の名がある。

二四代は井上九左衛門正寛（一一代、四代）（寛永一四〔一六三七〕年―正徳二〔一六九七〕年）。五代彌一郎、正寛の名が有り、熊本藩御留守居、御鉄砲組頭衆、二百石、のち七百石に加増された。

二五代は井上九郎左衛門正國（一二代、五代、万治元〔一六五八〕年―元禄一〇〔一六九七〕年）で彌一郎の名を継ぎ、他に勘兵衛、求右衛門、勘左衛門と言った名も有る。熊本藩では御留居御鉄砲組頭衆に属し、食禄七百石であった。

二六代は井上七郎兵衛（一三代、六代、寛文一二〔一六七二〕年―寛保二〔一七四二〕年）、平七郎、彌一郎の名が有り、山田郷平の養子となったが、のちに井上に復した。熊本藩御留居御鉄砲組頭衆、御小姓組頭、長岡監物組（米田家）、三百石（二百石、役料百石）、のち七百石。家督相続後、九郎左衛門長正を名乗った。郷平の父山田権兵衛（直彦）は熊本藩士、肥後国家老二座の米田是庸（通称長岡監物、一万五千石）の家臣で、子孫も以後同家に仕えた。食禄は三百石であった。井上嘉平次の弟の子を養子に迎え家督を相続させた。

山田権兵衛直彦の父は山田彌兵衛（のち権兵衛）と称し、加藤清正の家臣民部大夫山田権兵衛源政則の長男太郎右衛門で、浪人して武芸を指南した。

二七代は井上嘉平次（一四代、七代、宝永四〔一七〇七〕年―寛政二〔一七九二〕年）で、彌一郎、求右衛門の名を継ぎ、熊本藩士、御鉄砲組頭衆、御小姓組頭、七百石、寛保二（一七四二）年七月に家督を相続して九郎左衛門正矩を名乗った。井上嘉平次には彌兵衛と佐平太の子息がおり、彌兵衛（延享四〔一七四七〕年―文政六〔一八二三〕年）には彌丙（初代彌丙）の名もあり、井上本家を継ぎ（二八代、一五代）、熊本藩士、御鉄砲組頭衆、七百石、他に役料として五十石を加増された。寛政四年（一七九二）二月に家督を相続し、九郎左衛門正満を名乗った。

一方、井上佐平太は文政六（一八二三）年二月に分家（熊本藩士）し、長岡監物組（米田家）に属し、中小御小姓組となり、役料四十石を含め百五十石を食んだ。

二九代（一六代）（安永五〔一七七六〕年―嘉永五〔一八五二〕年）は父と同じ井上彌兵衛（二代彌丙）の名を継ぎ、井上家本家を相続した。御鉄砲組頭衆の一員として熊本藩鉄砲道指南役を務め、役料百石を含め七百石、好喜・彌丙、勘兵衛の名が有り、九郎左衛門正勝を名乗った。長崎・江戸に遊学して見聞を広める一方、鉄砲道指南役として藩士子弟の指導に当たり、その功により細川家から細川九曜紋変形三角紋（写真2）を頂戴した。

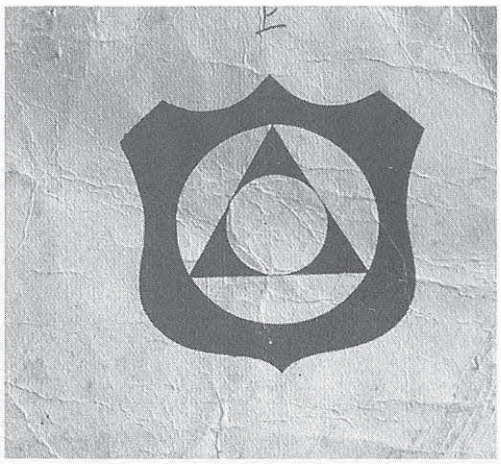

写真2

二九代井上彌兵衛には二人の息子がいたが長男は夭折、次男は井上権五兵衛と言い、また三〇代（一七代）となる井上静安（文化七〔一八一〇〕年一〇月一四日―明治二五〔一八九二〕年）を養子に迎え、三一代（三三代）及び一八代（二〇代）には井上静安の嫡男井上素一（天保一一〔一八四〇〕年―明治四二〔一九〇九〕年）を実子として育てた。家督を継がせた。

井上権五兵衛（文化一三〔一八一六〕年―明治一四〔一八八一〕年）には穆（ぼく）の名が有り、海翁と号し、熊本藩中小御小姓組を務め、熊本藩士飯田家に養子に入った。飯田家は清和源氏源頼信の次男頼清を遠祖とした信濃国伊那郡飯田荘（長野県飯田市）の出身である。

その系譜の流れに飯田家初代となる飯田直景（永禄五〔一五六二〕年―寛永九〔一六三二〕年）と言う人物がいる。山城国山崎（京都府大山崎町）の出身で、幼名を才八、長じて直景、角兵衛と称した。その角兵衛の角が後に覚の字に変ったが、それは「朝鮮の役」の晋州城攻撃の際、亀甲車を考案して勲功を立て、三千石の加増と共に与えられたものと言われる。従兄に織田家重臣佐々成政（天文五〔一五三六〕年―天正一六〔一五八八〕年）がいる。幼い頃父飯田直澄一族と共に佐々家を頼って山崎から伏見・近江を経て津嶋荘（愛知県津島市津島）の加藤清正の隣家に移住、清正とは竹馬の友となった。近江「賤ケ岳の合戦」（天正一一〔一五八三〕年、滋賀県）に随行し、更に清正の肥後入国に同伴し、天草志岐氏攻略に貢献して加藤三傑（森本一久〔儀太夫、永禄三（一五六〇）年―慶長一七（一六一二）年〕、庄村一心）の一人となった。初め禄高四千五百六石一斗二升、与力騎馬十四人、三百人扶持で、鉄砲者百人先手侍大将を務め、土木普請事業で才腕を発揮し、熊本城三の丸の百間石垣を築き、名古屋城では朝鮮出兵の折に見聞したであろう朝鮮式石畳築城法で築いたと伝えられる。後に食禄六千五百石となった。加藤家改易後は京都に帰り、慶長期（一五九六―一六一五）に深譽を開山とする浄土宗鎮西派正運寺（京都市中京区蛸薬師通大宮西入因幡町一一二）を開基したが、寛永九〔一六三二〕年九月一八日に逝く（欣浄院殿正譽天岳宗運大居士）と、境内の正妻（寛永八〔一六三一〕年九月六日没、養昌院殿榮譽壽

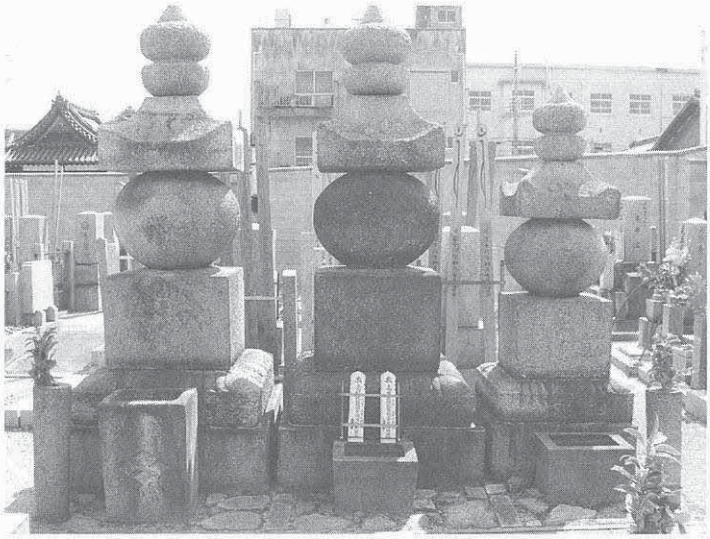

写真３　飯田覚兵衛の墓（中央）

庭清光大姉）の墓の脇に葬られた（写真３）。

直景には飯田覚（角）兵衛直國と飯田某の二子がいて、次男の飯田某は加藤家改易により浪人の身となったが、福岡藩黒田家に召し抱えられ、後年、中老となった。長男の直國には孫右（左）衛門と言う名も有り二代覚（角）兵衛を継いだ。加藤家時代の禄高は三百八十石で同心隊を指揮・管理した。改易後、父直景の命で熊本に残り浪人したが、細川家三代の忠利、四代の光尚に長子飯田孫右（左）衛門直久（基氏）と共に召し抱えられ、長岡監物組に属した。以上が近世までの井上家略譜である。

3．近代の系譜

時代は徳川幕府の消滅を以って鎌倉幕府（建久三〔一一九二〕年）から続いた封建制度が終焉を迎えた。廃藩置県（明治四〔一八七一〕年）に象徴される政治制度の改革が明治新政府によって矢継ぎ早やに実施され、士籍に属する人々の生活も激変した。井上家にとっても苦難の時であったが、身を以ってそれを体験したのが三〇代の井上静安（一七代）と三一・三三代の井上素一（一八・二〇代）であった。

井上静安は熊本藩士真鍋氏（三百石）の次男で頼兵衛と言い、藩御小姓衆を務めた。二九代井上彌兵衛の長女和歌の婿養嗣子となり、井上家の熊本藩御鉄砲組頭衆、藩鉄砲道指南役を継ぎ、役料百石を含め七百石を食んだ。維新後の明治二（一八六九）年から五（一八七二）年の間の家禄は六・七十俵と激減し、貧困が家族を襲った。明治七（一八七四）年に熊本市熊本区内坪井から三角太田尾村に転住し[2]、肥後太田尾村村長を務めた。

井上静安の長男井上素一は祖父彌兵衛好喜（二代彌丙）の子として育てられ、熊本藩士として七百石を相続し、鉄砲道指南役（御鉄砲組頭衆）を継いだ。明治初年頃には上京、市谷薬王寺町（新宿区）の井上毅宅に居住し、鉄道院に技官として出仕。明治二五（一八九二）年四月、父静安が体調を崩したため熊本に帰り、村議会議員を務めた[3]。

井上素一の代数の間の三二代と一九代が欠けているのは井上毅が井上本家を継承したが、病気のために継承を放棄し、井上素一に戻したためであった。井上素一には長男綱雄（明治元〔一八八六〕年―明治四年〔一八七一〕）、次男茂樹（明治五〔一八七二〕年―大正六〔一九一七〕年）、三男素雄（明治一五〔一八八二〕年―明治二二〔一八八九〕年）、四男（夭折）、五男敏雄（明治一六〔一八八三〕年―昭和一七〔一九四二〕年）、長女トモ（明治一八〔一八八五〕年―昭和？年）、六男（夭折）、七男昌康（明治二三〔一八九〇〕年―昭和五四〔一九七九〕年）、八男秀明（明治二六〔一八九三〕年―大正元〔一九一四〕年）の八男一女がいたが、早逝した子供が四人もいた。当時の医療衛生・栄養環境面に問題が多く有ったからだろうか。

井上家を継承したのは次男茂樹（三四代、二一代）で、長男綱雄が四歳で夭折したため戸籍上長男となり、明治二八（一八九五）年一一月に家督を相続した。夫人は鳥井カ子（明治四〇年〔一九〇七〕―？）で、鳥井家八代満喜（二代満喜）の三女である。鳥井家は藤山傳右衛門を祖とし、初代鳥井彦兵衛（八郎兵衛）の女の際は細川藩主六代宜紀の側室となった。二代彦大夫は細川藩大組附（三百石）に属し藩侯細川重賢（享保五〔一七二〇〕年―天明五〔一七八五〕年）の御書出（寛延元年、一六二四）を務めた。三代銀平

は御側御弓頭・御側御取次（三百石）、四代満喜（満喜名の初代）は御鉄砲廿長頭（長岡組、三百石）、五代亀之允は藩侯細川斎護の御書出（二百五十石）、六代勝七郎（彦大夫、謙蔵、養子）は細川斎護の御書出（三百石）役をそれぞれ務めた。茂樹・カ子夫婦には初子（明治四〇〔一九〇七〕年―明治四一〔一九〇八〕年）と正子（明治四二年〔一九〇九〕―?）の二女がいたが、正子は大正六（一九一七）年四月、父茂樹が逝去したため井上家の家督を相続、昭和二（一九二七）年九月一七日に叔父敏雄に家督を譲ると共に敏雄の養女となった。

五男の敏雄（戸籍上次男）は、家督を相続して三五代、二二代を継承した。鉄道省技官として明治一五（一八八二）年から明治三八（一九〇五）年まで台湾台南市の鉄道官舎に居住し、翌明治三九（一九〇六）年から大正一一（一九二二）年一二月まで北海道石狩国上川郡旭川町宮下通り五丁目（旭川市）の鉄道官舎に転居して鉄道建設と維持に努めたが、大正末期には台湾台南市に移住し、貿易商井上商店を経営、敗戦により昭和二一（一九四六）年に引揚げた。台湾では日本射撃協会猟友会台湾支部長を務めたりしたが、デング熱に感染して死亡した。

長女トモ（明治一八〔一八八五〕年―昭和?年）は北海道石狩国夕張郡（夕張市）の松浦勇に嫁いだ。昌康（明治二三〔一八九〇〕年―昭和五四〔一九七九〕年）は戸籍上四男として育ち、瀬戸水軍ゆかりの岡山津嶋家に養子に入った。秀明（明治二六〔一八九三〕年―大正元〔一九一四〕年）は戸籍上五男となったが、長崎商船学校に在学中、佐世保海軍工廠の軍艦機関室で事故死した。

敏雄の夫人は熊本藩士井口角四郎の長女恵喜で、夫妻には長男一男（明治三六〔一九〇三〕年―昭和四九〔一九七四〕年）、次男昌夫（明治三九〔一九〇六〕年―昭和?年）、三男三郎（明治四〇〔一九〇七〕年―大正一五〔一九二六〕年）、長女栄（明治四三〔一九一〇〕年―昭和?年）、四男素夫（明治四五〔一九一二〕年―昭和一七〔一九四二〕年）、五男寅彦（大正三〔一九一四〕年―昭和六二〔一九八七〕年）、次女須江（大正八〔一九一九〕年―?）の五男二女がおり、昌夫は新田家へ養子に入り、栄は台湾電力会社役員を務めた東某に嫁いだ。素夫は海軍大尉として戦死（二階級特進して海軍中佐）、須江は旧佐賀藩士小森家に嫁ぎ、寅彦は陸軍獣医少将となった。

井上家三六代（二三代）を相続した井上一男（明治三六〔一九〇三〕年―昭和四九〔一九七四〕年）は、鉄道省技官であった父敏雄の赴任先であった台湾台南市鉄道官舎で生まれ、当初、早稲田大学理工学部電気工学科に入学し化学・建築を専攻したが、医学を志して中退し、日本医科大学に入学、昭和八（一九三三）年に卒業し、昭和一四（一九三九）年に東京市本郷区春木町（文京区本郷三丁目）に耳鼻咽喉科医院を開業、昭和一七（一九四二）年から一八年にかけて、東京帝国大学関係者の設計になる病院を建設（延床面積一五〇〇坪〔四九五八平方メートル〕）したが、昭和二〇年（一九四五）三月一〇日の大空襲で壊滅、伝来の貴重な資料類も焼失した。家族は全員無事で、妻の春子（輝子のち春子、明治四二〔一九〇九〕年―昭和五七〔一九八二〕年）の実家を頼って、埼玉県浦和に在住の画家三尾呉石（明治一八〔一八八五〕年―昭和二一〔一九四六〕年、本名秀太郎）のもとに避難した。

次いで知人を頼って福島県伊達郡桑折（こおり）町に疎開、かつて千葉医科専門学校（千葉大学医学部）、慶應義塾大學医科専門学校（慶應義塾大學医学部）、日本医科大学等で教壇に立った経験を買われて、福島県立女子医学専門学校（福島県立医科大学）に勤務し、戦時女医養成に当った。この地での生活は昭和二三（一九四八）年に、荒川区日暮里二丁目に「井上医院」を開業するまで続き、昭和三六（一九六一）年には世田谷区宮坂三丁目に転居した。

春子の実家は近江（滋賀県）の古代氏族三尾族の末裔で、同地に有る三尾神社社家の後裔と伝えられる。三尾呉石の長女として東京市日本橋本町（東京都中央区日本橋本町）で生まれ、現杉野女子大学を卒業、春子の名付け親は東郷平八郎元帥であった。

三尾呉石は戦前、わが国を代表する虎の絵の第一人者で、日本一の「虎の呉石」と称えられ、一五歳の時、日本美術協会展（院展の前身）に初めて出展、農林水産大臣金子堅太郎（嘉永六〔一八五三〕年―昭和一七〔一九四二〕年）にその画才を認められた。岐阜の動物画家大橋翠石に師事して四条派を学び、東京勧業博覧会で「猛虎」が三等賞杯を受賞、文展で「寒風猛威」と「村芝居」が入選した。その後、院展、文展、日本美術協会展で度々入選。虎の研究のため数年間、満州、朝鮮に渡り寒帯の勇虎、インド、アラビアにも出向き熱帯の猛虎を写生行脚した。専ら虎専門に彩筆を振った。大正一二（一九二三）年九月、関東大震災の翌月、浅草（大正初期、日本橋本町から転住）から埼玉県浦和市に転住した。

その呉石が描く虎の絵が軍人に尊ばれた関係で、軍部中枢の軍人と親しくなり、それは後述する子供達の名も同様に斯界の方々によって付けられた。妹の三尾英子（大正一四〔一九一五〕年―　）の夫は、ふぐ毒のテトロドトキシンの抽出分離精製法を開発、化学構造を解明した薬学者で文化勲章受章者の津田恭介（明治四〇〔一九〇七〕年―平成一一〔一九九九〕年）である。津田恭介は旧制台北第一中学校で井上一男と同級であった。

一男・春子夫妻には、長男毅一（昭和一二〔一九三七〕年―　）、長女聰子（昭和一五〔一九四〇〕年―　）、次男孝（昭和一六〔一九四一〕年―平成七〔一九九五〕年）、三男敏（昭和一七（一九四二）年―　）、四男一志（昭和一九（一九四四）年―　）、次女洋子（昭和二〇〔一九四五〕年―翌年逝去）、三女奎子（昭和二二〔一九四七〕年―　）の四男三女がいて、毅一の名は荒木貞夫（明治一〇〔一八七七〕年―昭和四一〔一九六六〕年）陸軍・文部大臣、聰子は米内光政（明治一三〔一八八〇〕年―昭和二三〔一九四八〕年）海軍大将（首相）、他の方々は小磯国昭（明治一三〔一八八〇〕年―昭和二五〔一九五〇〕年）陸軍大将（首相）が名付け親であった。

井上毅一の名については昭和三八（一九六三）年頃、毅一が小田急線新宿駅ホームで偶然、荒木貞夫に出会った際、その理由を尋ねたところ、「君が生まれたおり、初孫なので、是非名付けて欲しいと呉石さんから頼まれた。そこで帝国憲法や教育勅語の草案者で、君のお父さんの縁続きの井上毅さんの名を採って毅一とした」と言われたと言う。毅一は昭和四七（一九七二）年に福島医科大学を卒業、東京大学医科学研究所（東京大学医学科研究所）員、同研究所附属病院外科医を経て、実父が経営する井上病院に務め、現在、医療法人井上外科記念会世田谷井上病院理事長を務める。

聰子は聖心女子大学、デンバー大学、南カリフォルニア大学をそれぞれ卒業し、現在カリフォルニア州の官吏として社会福祉関係の業務に当っている。孝は成城大学を経てバンクーバー大学を修了、アメリカにおいて医療事故に遭い急逝した。敏は上智大学と富士短期大学を卒業し、医療経営管理研究所を経営。一志は井上家三七代（二四代）を継承、マドリード大学哲文・獣医学・医学の三学部を卒業後、ケンブリッジ大学に留学、現在、世田谷・足立両区内の病院に医師として勤務している。洋子は夭折、奎子は桜美林短期大学卒業後渡米し、現在、米国永住権を得てカリフォルニア州福祉介護士として福祉業務に従事している。

4、傍流の系譜

井上毅は井上家二九代（一六代）井上彌兵衛の次男井上権五兵衛の流れに位置する。権五兵衛は飯田家に養子に入り、夫人は熊本藩士神山源左衛門の女美恵（文政二〔一八一九〕年―明治一八〔一八八五〕年）であった。[4]

権五兵衛・美恵夫妻には長男騏七郎（騏〔麒〕一郎）、次男良樹、三男多久馬、四男順大郎の息子がいて、いずれも熊本藩士であり、良樹は熊本藩士市野家に養子に行き、孫の堀江知彦は早稲田大学を卒業し、国立国会図書館館長を経て、二松学舎大学の教壇に立ち（名誉教授）、夫人中村波奈子は浦和高等女学校で三尾（津田）英子と同級であった。市野家は羽柴秀吉が長浜城主時代の譜代家臣で、大坂夏の陣後、加藤清正に仕え、加藤忠広の改易後

は細川家に仕え、長岡監物組に属した。

飯田多久馬こと毅は慶応二（一八六六）年二月二一日、熊本藩士井上茂三郎（恒三郎）の養子となり井上本家三二代（一九代）を継ぐと共に多久馬を改め毅と改名した。茂三郎は旧姓鈴木氏、熊野鈴木氏を遠祖とする天草代官鈴木紀州守の後裔で、井上本家の親族でもあった関係で、二七（一四代）代井上嘉平次の次男佐平太の養子となった。佐平太は熊本藩長岡監物組（米田家）、中小御小姓組（役料四十石を含めて百五十石）で、文政六（一八二三）年二月に分家した。

井上毅の配偶者は初め二宮常子（嘉永六〔一八五三〕年―明治一七〔一八八四〕年）、次いで木下鶴子（嘉永二〔一八四九〕年―昭和一〇〔一九三五〕年）、三番目が近藤稲子（文久三年〔一八六三〕―昭和三〔一九二八〕年）[5]であった。

二宮常子は熊本藩士二宮九平の長女であったが、三二歳で逝った。二宮家の祖の一人に新右衛門と言う人物がいて、彼は元禄一六（一七〇三）年二月四日赤穂義士片岡源五右衛門を介錯したことで知られる。

木下鶴子は時習館訓導で木下塾を主宰した先師木下宇太郎改め眞太郎（嘉永四〔一八五一〕年に改名。文化二〔一八〇五〕年―慶応三〔一八六七〕年）の長女であった。眞太郎には業広、犀譚、韡村の号が有り、儒学者安井息軒（寛政一一〔一七九九〕年―明治九〔一八七六〕年）、儒学者芳野金陵（享和二〔一八〇二〕年―明治一一〔一八七八〕年）、政治家で思想家の藤田東湖（文化三〔一八〇六〕年―安政二〔一八五五〕年）、塩谷宕陰（しおや・とういん、文化六〔一八〇九〕年―慶応三〔一八六七〕年）らと「交会」を主宰した人物である。末弟木下助之（徳太郎、文政八〔一八二五〕年―明治三二〔一八九九〕年）は明治一二（一八七九）年に熊本県会初代議長、玉名郡長、衆議院議員を務め、藩政時代には鉄砲製作に関与した。孫に法政大学教授で劇作家だった木下順二（大正三〔一九一四〕年―平成一八〔二〇〇六〕年）がいる。木下鶴子の末弟に法学博士木下広次（幼名小吉郎、嘉永四〔一八五一〕年―明治四三〔一九一〇〕年）がいる。司法省明法寮の出身で、パリ大学に留学して法律を学び、帰国後文部省に入り、のち東京大学教授、第一高等学校長を歴任し、勅選貴族院議員を務め、明治三〇（一八九七）年に京都帝国大学が創立されると同時に初代総長に就任、〝剛直の人〟で学校管理に長じたと言う。井上毅が逝った際、葬儀委員長を務め、〝梧陰文書〟の保存に努めた。

近藤稲子の出自については定かではない。だが毅との間に長女富士子（明治一九〔一八八六〕年―昭和一九〔一九四四〕年）、次女時子（明治二一〔一八八八〕年―大正三〔一九一四〕年）、三女糸子（明治二二〔一八八九〕年―昭和二三〔一九四八〕年）の三姉妹が生まれ、富士子は毅・鶴子の息女として入籍し、熊本県士族で儒学者、東京帝国大学教授、学士院会員の岡松甕谷（文政三〔一八二〇〕年―明治二八〔一八九五〕年）の四男岡松匡四郎（明治九〔一八七六〕年―昭和三四〔一九五九〕年）を明治二八（一八九五）年一月四日、婿養子に迎えて夫婦となし、家名を継がせたが実子は出来なかった。岡松匡四郎はのちに小池哉子（明治三六〔一九〇三〕年―平成六〔一九九四〕年）との間に匡子（山之内、昭和二〔一九二七〕年―　）、匡一（昭和四〔一九二九〕年―）、邑子（漆原、昭和七〔一九三二〕年―　）の一男二女を得た。

時子は東京府の早瀬義質の八男早瀬義正（明治九（一八七六）年―?）に嫁いだ。義正は明治四四（一九一一）年に東京高等商業学校（一橋大学）を卒業後、三菱商事に入社、上海支店次席を経て豊国銀行に転じ、銚子・新潟支店長・営業部長を務め、日比谷銀行（現りそな）常任監査役、日比谷地所部長、九州水電主事、早川電力、田代川水力電気の取締役等を歴任した人物であった（如水会電気協会電気倶楽部会員）。義正・時子夫妻には子が無かった。

唯一子を成したのは糸子であった。大阪の山田八郎兵衛の四男山田正三（明治一五〔一八八二〕年―昭和二四〔一九四九〕年）に嫁いだ。山田正三は明

治四二（一九〇九）年京都帝国大学独法科を卒業し、京都帝国大学法学部教授となり、法学部長を務め、昭和一八（一九四三）年一月に退官（名誉教授、法学博士）した。山田夫妻には二男二女の子供がいて、次女を通じて井上毅の血が現代に繋がっている。

おわりに

本家譜では調査で得た情報の一部を記述することにした。井上一志氏を通じて井上本家及び関係親族の方々、熊本・兵庫・三重県などの図書館等関係諸機関のご助力にも与かったが、井上一志氏の話によれば実父井上一男は、井上毅のこと、井上家譜のことなど諸々の事情に通じていたから、本家譜の調査が生前に行われていたなら、更に詳しい情報が得られたであろうと残念がられた。没後三六年、今となっては如何ともし難い。次いで困った事は事情を知る高齢の方々が次第に幽明境を異にされたことであった。このため調査は時間との闘いとなった。

長老の女性の方に会いに入居している介護施設に出向いたり、得た情報を基に関係家族に手紙を書いて問合せたりもしたが、徒労に帰すことが多かった。東京や京都に有る寺院にも出向き、墓石の調査も行った。それでも道半ばながら、可成りの成果が得られた。それも井上一志氏のご努力有ってことである。紙上を借りて謝意を表したい。今後情報を一層精査して井上家譜の内容充実に努めたいと考えている。

なお同姓から新たな関係が浮かび上がった。小説家で詩人の井上靖（明治四〇〔一九〇七〕年―平成三〔一九九一〕年）との交流がそれである。井上敏雄、一男父子は井上靖の祖先と出が同じ（信濃源氏井上〔源〕頼季流）であることから親交を深め、敏雄が旭川の鉄道官舎に住んでいた頃には旭川在住の井上靖の父親を訪ね、また世田谷に越してからは、同じ町内に住んでいた井上靖と邂逅し、時には朝の診療時間になっても井上靖宅から戻って来ないことも度々だったと、一男の妻春子の思い出が伝わっている。

註

（1）井上毅が谷中の日蓮宗瑞輪寺を東京の菩提寺に定めたのは、加藤清正の加藤家並びに飯田家の宗派が日蓮宗だったこと。家臣として日蓮宗にするのは当然のことで、東京・谷中で最も大きい瑞輪寺を選んだと言われる。

（2）「井上静安」は熊本市熊本区内坪井より明治七年太田尾村に転住。おそらく明治九（一八七六）年の「神風連の乱」と翌年の「西南戦争」を避ける為と細川家一五代藩主の生母志津（阿蘇惟孝に嫁ぎ、のち離縁）の三角別邸を守るためであった（井上一男の話）

（3）「井上素一」の『戸籍抄本』には「本籍　熊本県宇土郡太田尾村四百六拾九番地」「前戸主　井上静安」「戸主　父　静安長男　井上素一　天保十一年九月廿二日明治廿五年四月九日東京市牛込区市谷薬王寺前町八拾番地井上毅方同居転住」とある。

（4）井上毅の母の神山家の系図は神山寿仙―理兵衛（権平、二百石、御次）―喜内―忠兵衛（御歩頭、二百石）―八百八（忠兵衛）―市右衛門―又彦（忠兵衛、御郡代当分、二百石、寛政元〔一七八九〕年一一月～三年九月＝菊池郡代・野津原鶴崎郡代〔大分〕）―鶴太（養子喜一郎弟次男）―東作（喜内、百五十石）―源左衛門―伝次（美恵、源左衛門娘、伝次妹）と続く。

（5）瑞輪寺墓所に有る近藤稲子の墓（平成一八年頃現在地に移築）には正面に「近藤家之墓」、右側面に「貞心院妙勤日行信女　昭和三年三月廿四日　近藤稲子六十六才」とある。左側の墓の正面には「先祖代々精霊」、左側面に「柳翠微笑信女　嘉永六丑年四月廿五日」「玉光禅童子　嘉永三戌年五月十七日」、下の石に「近藤」とある。近藤稲子の没年から計算して文久二（一八六二）年生まれとなる。富士子を二四歳（明治一九〔一八八六〕年、毅四四歳）、時子を二六歳（二一〔一八八八〕年）、糸子を二七歳（二二〔一八八九〕年）の時に出産したことになる。